

(プレスリリース)

令和3年10月22日

九州大学大学院芸術工学研究院
株式会社エックス都市研究所九州事務所

「那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第4回）」9月17日開催（オンライン）のトークセッション要旨と事後アンケート結果のお知らせ

9月17日にオンライン開催（参加申込者約85名）しました「那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第4回）」のトークセッション要旨と事後アンケート回答結果をお知らせ致します。

※「ウォーター・パークマネジメント」とは、水辺空間をネットワーク化し、行政・民間・市民・大学等が連携して、地域の人々皆で水辺・公園を運営していくという考え方です。

記

1. 資料1 トークセッション要旨
2. 資料2 事後アンケート回答結果
3. 資料3 本プログラム
4. お問い合わせ先 那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会事務局

（株式会社エックス都市研究所九州事務所内）

主任研究員 尾藤 文人

住所 〒802-0005 福岡県北九州市小倉北区堺町一丁目2番16号

十八銀行第一生命共同ビル9階

TEL 093-513-2252 FAX 093-513-2253

※プレスの方で取材を申し込まれる方は上記事務局まで、ご連絡下さい。

(以上)

トークセッション要旨（那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第4回））

- 建物をデザインする人達は偉大だと憧れてしまう。前半の S のお話の中で、プロジェクトそのものも面白いと思う。どういう人達が関わって始まったのか、A さんが居なくてもそういう事は起きるのか。
- 「まちはだれのもの」、に関しては、私たち家族が地域コミュニティの中で生きづらさを感じる場面が重なってそれが直接的な動機付けとなったのです。～7年前から住んでいるのが、都心の、近年タワーマンションやらオフィスビルやらが林立する再開発地区になった街です。布石としては、自宅の近所に S ハウスという、ある民間のコミュニティ拠点があって、質と内容の高いコミュニティの場を目指している志高い施設なのですが、そこで開かれた市民向けのダンスワークショップに当時小学生だった娘と一緒に参加し始めて、息苦しい現状から救われた経験があったんです。そこを拠点にして、私も何らかできるかもしれないと思い始めて。最初は一市民として参加していたのですが、自分もかねてから問題意識を持っていたので、子ども達のために何とかしたい、やってみようとなった。そんな思いの蓄積と経験があって、そこで一步踏み出したわけです。
- そういうことは素敵だと思う。そういう土壌が少しずつできてきて、S ハウスがあって、A さんがやって、また次の人が一步を踏み出す。
- 市民が自分の街を育むという循環に自然に組み込まれていくというのが理想だと思う。私も参加してくれた若いママ（元小学校教員）にやってみない？と勧めている。次、誰か面白い人をお友達集めて自分で企画してみない？という話をしました。地域の行政に「市民発の文化芸術活動をサポートする」という趣旨の助成金があるのも背中を押してくれた。
- お金をかけなくても、日常の中にも非日常の面白いものはいくらでもできる。たくさんお金をかけないと面白いものが起こらないと思いがちだが、実はそうでは無い。自分たちが居心地のいいと感じる事ができるような場があちこち出来てくるといい。那珂川にもそういう気持ちにさせるような拠点が出来ると面白いかなと思う。
- 都市部ではしばしば関わる人がエリアごとのカラーで分類されている。例えばオフィスワーカーとして街に関わる人だけがいるエリアとか、都市の中で色んな層の人が独自の領域を使っていて、それぞれが分断されている。隣に居てもお互いが見えないから繋がるのが難しかったりする。那珂川は歴史もあるし非日常の横のつながりが元々あ

るのではないか。そういう雑多な人種が入りやすい、アフォーダンスがあると言うか、ずっと境界を超えて自然と参加できるみたいな。歩いていてふっと参加できるような間口の広さと入り易さがあると面白い事が出来るかもしれない。

- ゲーツヘッドと可見市の事例、お手本として挙げて頂いた。街の中の生態系と言ったときに、そこではどのようなものをイメージされましたか。都市部は人と人との関係性を作ることが大事と分かってても、なかなかそれが出来ないのが現状です。Sハウスで色々な企画があっても、主催者の共通の悩みはなかなか参加者が集まらないこと。人づてとか直接に接点がないと来ない。生態系をどう作っていくか、というのが重要だし難しいことでもあるのかなと。～わたしは地域のコモنزのデザインでそのきっかけを作りたいと思っていますが。
- 東京のレベルで言うと生態系は難しい。東京は合計で20年弱住んでいた。最初、東京の大学に行った時に周りから介入されなくて楽と思った。だけど、こんなに人がいるのに人に出会わない。イベントがあってもそれが発展していかない。すぐに別の集団に組変わってしまう。福岡に来て、割と似たような人がずっと居る。これくらいが住みやすいのかなと思った。文化が充実しているところは人口が10万人から100万人の間ぐらい。中小の都市は経済以外に目玉が無いので、何か頑張ろうとやる人がたまに居る。それ以上になると消費経済の方が優先されてしまって、花火的に面白いことをポンとやるが増えてくる。消費することが日常の生き方になってしまって、楽しいんだけど、自分たちがそこにいるという存在感、生きていること、居てよかったと感じる事はなかなか無い。
- 街の中であっても、生態系という言葉からは自然や森林が持続再生するシステムとの共通点もイメージする。Sハウスは管理者がコミットしすぎず、適度な塩梅に放任されている感じ、先ず近隣住民や利用者からのアイデアを聞いてそれを後押しするような運営姿勢が感じられる。森林も人間の手が入りすぎるよりは、ほったらかしていた方が再生する。そして森林の持続には適度な攪乱も必要で、今ある状況が小さな規模で崩れて空き地ができると、そこに新しい種が発生する。Sハウスは都市にぽかっと空いたとても贅沢な隙間で、本来のコモنزも贅沢な隙間であると思う。人口減少時代の日本では、今後そういった空間が再び生まれるのではと期待する。東京に比べれば、福岡は贅沢で質の高い隙間や空き地的なスペースがまだ残っていて、コモنزが発生できる可能性があると思う。アートプロジェクト、ソーシャルアートプロジェクトでは当初の予定にない、思いがけない結果が起きる事に価値があるという評価軸がある。あまり計画しすぎず、適度な放置と攪乱があって、新しい種が出てきてもそれは生態系の持続に欠かせないよね、というのが、社会包摂と生態系が結びついた街のイメージかな、と考

えている。

- まちはだれのもの、はマスターやメンターと呼んでいた、来ていただく大人達がなるべく違う人達で、あまり近所で見ることが無い人達、なるべく振れ幅の広い人達、こういう人が社会の中でちゃんとその活動を生業にして生きているんだ、子どもも大人も学校とか塾とか受験とかで価値観がモノトーンになっている中で、参加した人に、こんな風に自由に生きていいんだ、と思えるような人たちに会わせるといいう事が目的だった。
- 誰が所有者になっていくかという事と関わってくる。設計のプロセスに関わっていくことがその空間への愛着につながる事だと思う。他人事ではなく自分事になっていく。公共、公というものに対する意識が希薄なんだろうと思う。多くの日本人の公共、公というのは、行政=公。でも、それは誤りで、私たちみんなが集まって公共を作っている。ルールを守る人達だけが公共を作っている訳ではなくて、ルールからはみ出る人達やルールに居心地の悪い人達も公共を作っている。そういう人達も物事を作ることに関わっていくことで、今まで排除されがちだった人が排除されなくなったり、ちょっとしたイノベーションが起きていく。非日常的なところに限られていたものが、日常に入っていく。特に公的な空間をどうするかという事に関しては、そこにいろんな人がはいつていくことで、その空間が今まで違う公、色んな人達で作る公になっていくんだと考えている。
- 公共、パブリックの捉え方については、現状認識を含め、同感です。日本では、公共空間は行政から上から一方的に与えられるもので、お互い迷惑かけないように遠慮する場所、と思いつ込んでいます。つまり「誰のものでもない」。けれど実は、公共／パブリックとは「みんなの所有」なわけで、根底から枠組みを変えていく事はすごく大事だと思う。また、みんなで参加、って言ったときに、立場とか役割を着せられてしまうと、それ以外の行動や関わりに無頓着になることがある。イベントに参加して、「あ～面白かった！終わり。」と消費者として受け身になってしまうと、その隣で起きていることが見えなくなる。イベントに何ヵ月も前から申し込まないと体験できない特別な事は次につながるのか？と疑いながら、日常の行動範囲の中に上手く入り口を組み込んでいく、仕込んでいくと、意外と拡がりがあるって自由に出来たりすることがある。イベントとして完璧な計画、許可を申請して監視員がいてとなると、こちら主催者側、あちらお客さん、という「興行」になってしまう。なかなか不自由。なるべく自由に日常の中でゲリラ的に、誰でもが主体的な参加者としてできるといいのに、と思う。
- 福岡は東京と比べて日常と非日常が近い。都市と自然の関係でも、福岡は海と山が近い。

福岡の都心の真ん中からも山が見える。今、都会に居る時に、都会から山が見える事を自覚する人は少ないかもしれない。

- 社会包摂について話をするとき、環境や自然という言葉と組み合わせることで話しやすく感じることもある。社会包摂と言葉だけで話を進めると型苦しく伝わりにくい場面も多いが、社会包摂にパートナーを見つけると理解や浸透がしやすくなるのでは、と思う。社会包摂とアート、社会包摂と環境問題など、親和性が高い組み合わせや、社会包摂と組み合わせるといいパートナーについて何かヒントがあるでしょうか。
- 那珂川エリアをウォーキングルートに、というのは面白いと思う。歩きながら何かをやる、歩き回る行為と空間、環境。川沿いだったり、見晴らしのいいところだったり、自然と地続きに接点がある環境の中で、参加者は、言わば動物らしく探索してゆく、心を開いていくきっかけになると思う。いつもと似たような場所で自らの立場の衣を着て話をすると、なかなか殻を破る事が出来ない、オープンエアで川のせせらぎを聞きながら、という舞台装置が主体と同じ位重要だと思う。
- 社会包摂と言った時に、自分の立場を持ち出すと上手く行かない。そもそも人間は皆平等だし、隣に居る人と私は違う。マジョリティの人達も多様性がある。遊びのようなものが大事である。日常の自分の立場から離れる、自分の立場とは違う、子供の自分に戻るような、そういう仕掛けがあることによって、実は社会的立場を背負っている自分と違う自分があるとか、色々別の感じ方が出来る。遊びのような仕掛けを私は「アート」だと思っている。普段の自分を忘れてしまうような遊びの空間があることが、色んな人達が自然と関係を結んでいける場になる。
- 那珂川は天神とか中洲とか、非日常をはらむ面白い場所にあるし、地域の魅力をみんなで共有することもいいと思う。
- 町内会とか商店街とかの旧来コミュニティ内で共有されている観光地としての魅力だけではなく、ノスタルジーや慣習に浸るだけにならないで、改めてそこで楽しみ方を発見できるような、ライブな街としての魅力が共有できるといい。
- 色々な人に入ってもらいたいのであれば、まずは当事者の話を聞く事が大事。障害のある人や、家族観で再考するのであれば、LGBTの人達の話を知るとか、そういう場と一緒に作っていく人達とコミュニケーションをして頂きたい。
- 社会包摂と言った時、マイノリティの人達を考えると、ターゲットをその人に置くの

ではなく、フラットにみんなで輪を囲んで対話を試みる。頭の中の概念でカテゴライズして知ったつもりになっているけど、きっと会って話してみると人間ひとり1人全然違うと思うから。

- ~その意味でわたしが最近ハマっている「哲学対話」はお勧めです。

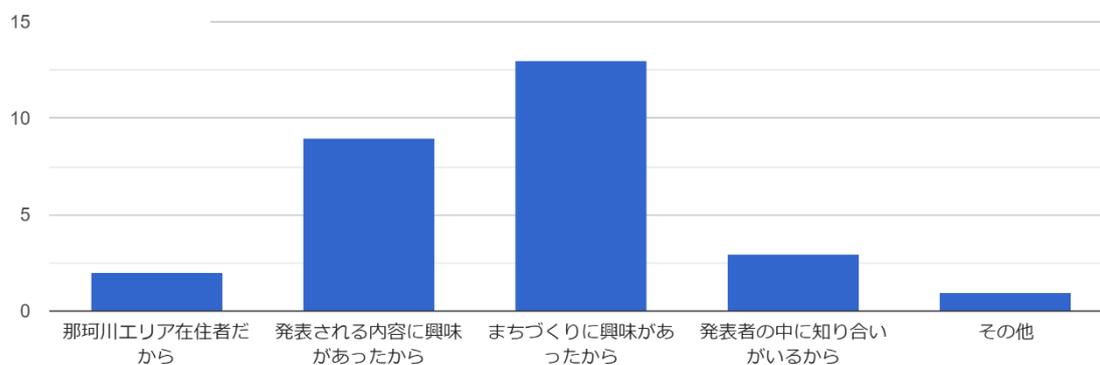
(以上)

事後アンケート結果（那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第4回））

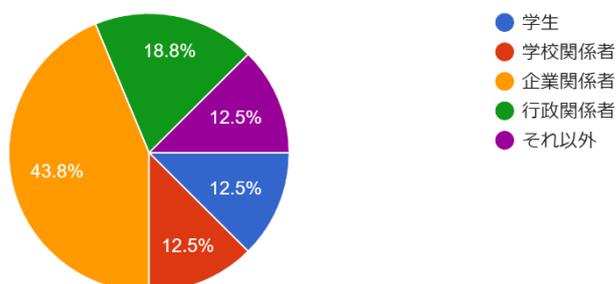
- ・調査方法：インターネット調査（参加登録者（約85名）へアンケートを依頼し、16名の回答（匿名）を得た。）
- ・調査期間：令和3年9月17日（金）～10月8日（金）

【質問内容と回答結果】

◎質問：那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会（第4回）に参加された動機をお聞かせ下さい。（複数回答可）※必須回答



◎質問：あなたの属性にチェックを記入してください。※必須回答



◎質問：那珂川エリアに望ましい姿がございましたらご自由にご記入下さい。

- 今日の発表の趣旨にあった「多様な方の居場所づくり」に是非 WPM の対象地での可能性を見出していければと感じました。確かにコロナも相まって、既存の枠からはみ出てしまった方の居場所こそ、この場所の可能性であり、福岡にはそういった文化がもともとあったが（親不孝通り界限の音楽、警固公園のストリート系）段々と、そういった場所がなくなってきており、福岡の文化の厚みのようなものが薄れてきているような気がしています。夜になると市役所前広場でダンスを踊っていたり、福岡市公認のパフォーマーも街中にちらほらといますが、昔のようにどこかしこで路上ライブをやっていたり、悪そうなお兄さんがたむろしていたり、スケボーパーク化していたり、若者を惹きつける場所が少なくなってきているように感じます。そういった文化も現代版に解釈した上で、何か文化を生む場所を新たに作らないと、せっかく福岡が積み上げてきていた独自の文化が、コロナもあって崩れ去ってしまっているように感じます。ある程度の規制をしつつも、そうした文化創造の場が、誰のものでもない川沿いでは展開できるような可能性を感じました。
- 都心と郊外のメリハリがあるとよいのかなと思いました。
- 福岡都心部には海や河川などのウォーターフロント空間が多く存在しているが、あまり意識されておらず、空間としても残念な所が多い。那珂川エリアも良質な河川空間を創出し、福岡都心の重要な空間、魅力的な空間として認識されるべき。
- 再開発が進む福岡都心を魅力的なまちとするためには那珂川沿いの空間は重要。歩き回れる回遊軸として良質かつ使いやすい空間を作り出せれば、相乗効果が生まれ福岡都心全体の魅力につながるのでは。
- リバーサイドが整備され、季節の応じた景色が見え、定期的に催しが行われるような、市民の憩いの場になってほしい。
- 河川沿いの無電柱化による景観形成などにより、賑わいと落ち着きが両立した空間形成が望ましいのではないかと思います。
- 水辺へのアクセス性や親和性を感じる空間づくりとエリアに行けば何か楽しいことがあると思わせる演出と仕掛けがほしい。○○まで行ってみようかと思わせる地区に。
- 職住近接の心豊かな空間
- 中州のイメージはそれぞれ人によって感じ方は違う。全国から集客するエリアであることは確かであるため、中州とうまく調和することが大事であると思う。
- 天神と博多を結ぶだけでなく、新たな価値観を持つ第3の拠点となるべきではないかと考えます。
- 自然と人と技術が調和したまち

◎質問：全体を通しての感想やお気づきの点がございましたらご自由にご記入下さい。

- もう少し、検討対象地で何ができるか？どんな動きができるか？という即物的な議論もほしかったように感じます。社会包摂に関する哲学的な議論はとても興味深く、個人的には非常に面白かったのですが、少し一般の方には伝わりにくいレベルの話になっており、何かこの場所での活動につなげられるファシリテートがあると、より具体のイメージがわかりやすいなと感じました。それを視聴者に考える機会をゆだねるなどすると、次につながるような気がしながら拝聴しておりました。が、いずれの事例も大変興味深く、参加して良かったと思います。次回も期待しております。
- だんだん那珂川と周辺を知らないと議論に参加しにくくなってきました。(もちろん議論が具体化していくことはよいことですが)
- 業務の都合で冒頭の高取先生の趣旨説明しかお聞きすることはできませんでしたが、河川沿いの活性化に関心がありますので、引き続き関心をもってまいります
- エリアらしさアイデンティティ等の言葉が出ていました。王道の講評、コメントですが、具体的には簡単そうで難しい。その辺の掘り下げが欲しかった。
- Web の講演会は初めて参加しましたが、リアルのものと同色なく、とても良いと思いました。スムーズに進行するには仕切りの方の技術が必要だと思いますが、とても参考になりました。
- 具体的な地域の設定の上での議論が参考になりました。
- 今回も示唆に富んだ密度の濃いイベントでした。今後の那珂川ミズベ活性化に活かしてまいります。

(以上)

那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会 #4

日時:2021年9月17日(金) 13:00-15:15

参加方法:オンライン(Youtube)によるLive配信

【プログラム】

全体司会 尾藤 文人(株式会社エックス都市研究所 主任研究員)

※視聴者からリアルタイムで質問を受付ます。

第1部 講演会・トークセッション

趣旨説明 13:00-13:05 高取 千佳(九州大学大学院芸術工学研究院 准教授)

講演① 13:05-13:20 「芸術文化の視点から見た社会包摂と公共空間」



中村 美亜 NAKAMURA Mia
九州大学大学院芸術工学研究院 准教授

アートと芸術の関わりを研究。とくに多様な人たちが参加するアートの場の作り方、ファシリテーションの方法、芸術文化の価値と評価に関心がある。共編著に『文化事業の評価ハンドブック』(水曜社、2021)、『ソーシャルアートラボ』(水曜社、2018)、単著に『音楽をひらく』(水声社、2013)、『クィア・セクソロジー』(インパクト出版会、2008)など。

講演② 13:20-13:35 「都市の公共空間における社会包摂」



韓 亜由美 HAN Ayumi, アーバニスト
STUDIO HAN DESIGN 代表. 元公立前橋工科大学 教授

東京新宿生まれ。ヒトとして生きられる棲息環境/生態系としての都市をテーマに、そこに生活する誰もが主体的に享受できる豊かさの新しい価値をもとめ、一貫して公共分野を対象に地域性と社会性を意識したデザイン活動を展開する。主なプロジェクトに『まちはだれのもの ワークショップシリーズ@芝浦』(2018-19)、『UR朝霞浜崎団地バリューアップ』/2017年日本建築学会賞(業績)受賞、『国道18号線碓氷バイパスODS』(2019)、『日本海沿岸東北自動車道トンネルルート』(2012)、『首都高ODS』(2008)、『東京湾アクアライントンネル進入部擁壁』(1993)、『JR新宿駅新南口整備工事 新宿サザンビート』(2005-2007)、『豊田ジャンクション』(1996-2002)など。

トークセッション 13:35-14:20 「社会包摂のこれからと那珂川の未来」

中村 美亜 × 韓 亜由美 × 安部 良



コーディネーター

安部 良 安部良アトリエ一級建築士事務所 代表

建築家として、地域拠点や新しい福祉の場などの設計を通じ、“コミュニティの見える場面”づくりに取り組む。また2020年より総務省地域力創造アドバイザーとして全国各地の地域活性プロジェクトに携わる。プロジェクトに『島キッチン』/2021年度日本建築学会賞(作品賞)受賞、『あわくら温泉元湯』(岡山県西 粟倉村)、『福屋八丁堀本店パブリックガーデン SORALA』(広島県広島市)など。

==== 休憩 (14:20-14:30) =====

第2部 那珂川スタジオ 学生作品発表 14:30-15:15

九州大学大学院 人間環境学研究院・芸術工学研究院 (担当教員:黒瀬・鶴崎・箕浦・高取)
那珂川(春吉橋)デザインスタジオ 4作品発表

趣旨説明 高取 千佳 コメント 中村 美亜・韓 亜由美・安部 良

【お申し込み】

Google フォーム(下記)からのお申し込みをお願いします。
<https://forms.gle/y8QQVEQxKjrqsU2V8>
※2021年9月16日(木)15時迄
※参加費無料

【お問い合わせ】

那珂川ウォーターパークマネジメント研究会事務局
(株式会社エックス都市研究所九州事務所内) 主任研究員 尾藤文人
住所 〒802-0005 福岡県北九州市小倉北区堺町一丁目2番16号
十八銀行第一生命共同ビル9階
TEL 093-513-2252 FAX 093-513-2253

主催: 那珂川ウォーター・パークマネジメント研究会

共催: 九州大学大学院芸術工学研究院 社会包摂デザイン・イニシアティブ

